

「民衆のうた」として諏訪の地に花ひらいた 俚謡の歩みについて

萩原儀久*

1. はじめに

平成12年10月にオープンした八ヶ岳麓文芸館も3年目を迎え、一步一步その骨格も明らかとなり、資料も豊かさを増してきたことは喜ばしい。

▼第一は、正岡子規・伊藤左千夫・島木赤彦・両角雉夫・森山汀川・篠原志都児・原田泰人・松沢常毅等から現在の北沢敏郎先生門下へとつづく「アララギ」「ヒムロ」系短歌の系譜。

▼第二は、子規と時代を同じくして出発し、阿心庵晋永機の系統を継ぐ小平雪人と、子規・虚子門の高弟両角竹舟郎や飯田蛇骨・竜太系の俳人たち。

▼第三は、堀のぼるの「俚謡公論」「白樺」誌に集まった俚謡作家群。

▼第四は、東洋大学名誉教授 伊東一夫先生の生涯をかけて研究・蒐集された、文豪島崎藤村の貴重な遺品・研究資料である。

さらに、生涯学習都市の裾野の広がりを示す詩集・歌集・句集・随筆集・俚謡集も多数寄贈されて、まとまった展示会も持たれるようになった。

本稿では、今まで比較的知られることの少なかった俚謡について、その成り立ちから岳麓俚謡人の活躍について誌してみたい。

2. 日本の伝統的な短詩型と俚謡

(1) 和歌 5・7・5・7・7の三十一文字。(数え方 1首)

- ・漢詩に対する大和歌(やまとうた)として、和歌という。
- ・奈良時代に成立した万葉集の中には、長歌や施頭歌なども含まれ、三十一文字のものは短歌とも言われる。

(2) 俳句 5・7・5の十七文字(数え方 1句)

- ・^{れんが}連歌—平安時代から室町時代に流行した連歌は、短歌から派生したもの。短歌の5・7・5の上の句(長句)と、77の下の句(短句)とを交互に数人で詠み合い、二句で完了する。

句連歌(短連歌)と、発句・短句・長句と詠み連ねる鎖連歌くさりれんがとがあり、36句連ねる歌仙のほか、50句・100句(百韻)で完結するものが流行した。

○俳諧—純正な本格的連歌に対して、滑稽・機智を特色とする俳諧連歌が独自に成長し、江戸時代に庶民文芸として独立・発展した。広義には、俳句・連句・俳文・俳論などを含めた総評で「俳文学」の意。

○俳句—俳諧の連歌の発句(ほっく)を指し、明治20年代に正岡子規が新しい独立の

*八ヶ岳麓文芸館担当

詩形式として「俳句」の称を用いた。季語や切れ字をよみこむ伝統俳句に対し、口語・自由律・無季俳句などがある。Haikuとして今や世界的にブームをおこしている。

○川柳—5・7・5の十七文字（数え方 1句）

雑俳の一種。機知によって人情の機微^{うづ}わうがち、風刺と滑稽を主とする江戸庶民文芸。現代も時事川柳・会社せんりゅうなど盛況である。季語・切れ字を必要とせず口語・俗語をも用いる。俳諧の前句づけの付句^{つけく}が独立したもの。

○俚謡—7・7・7・5の二十六文字（数え方 1章）

民間に自然発生的に発展してきた俗謡・民謡・里唄。馬子唄・船頭唄などの労働歌・盆踊り唄・座敷唄などの民間で盛んにうたわれたはやり唄。最初の7音はさらに3・4、次の7音は4・3となだらかな小節を作って、うた全体の起伏をなめらかにしている。

3. 俚謡の流れ

(1) 源流

○文字はなくても口から耳へ伝える唄が、原始社会にも労働・生活と共にあったであろう。

(2) 隆達節（中世～近世初期）流行の小唄。歌詞は7・5・7・5のものが多い。

—弄斎節（江戸初期）元和・寛永の頃（1615～44）遊里を中心に唄われた。

(3) 潮来節（元、利根川の船頭歌。潮来出島のまこもの中であやめ咲くとはしおらしい、）江戸中期頃から流行。

- 都々逸—天保末（1840～）頃から三味線歌、お座敷唄として流行。都々逸坊扇歌が曲節を大成。
- よしこの節—江戸時代後期、江戸・名古屋・大阪～地方へと大流行。小唄・端唄・新内など。

(4) 御嶽節 — 労働のうた……馬子唄・追分・白ひき唄・田植唄・漁師唄など。 盆踊うた……木曾節・群上・はんや・おけさなど各地の民謡に発展。

(5) 黒岩涙香による「正調俚謡」運動

○明治37年、全国紙「万朝報」により、従来の都々逸・よしこの等座敷唄の卑俗性を脱皮して、日本古来の人情・風俗・自然の美をうたうべし、と提唱した。

涙香選により全国から毎日何千通の応募があり、万朝報俚謡壇から深沢吟扇・弘用知秋・中山士峰・飯島松涛・野村賤の家・楠草人など多くの俚謡作家が輩出した。

4. 信州・諏訪における「正調俚謡」作家の活躍

(1) 万朝報の俚謡壇に盛んに投稿した先輩作家たち

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ○吉沢可寛公 | ○榎沢 若葉 | ○清水二六史 | ○小池 白羊 |
| ○土屋 金麿 | ○笠原 逸公 | ○百瀬香遠流 | ○八幡 麻胡 |
| ○和佐田鈍刀 | ○白鳥 秋声 | ○堀内南霞園 | ○山浦 一星 |

茨城・東京・愛知・岐阜・岡山・高知などと共に「俚謡王国長野」を形成し、昭和へと続く次の世代の作家を育てた。

- (2) 全国俚謡作家十六人集「鬱金の風」(昭和6年)
平林伸朗(上諏訪)・堀のぼる(茅野)ら信州作家掲載
- (3) 下野幽波編「花野」俚謡四十六人集(昭和18年東京小春社刊) 所載の郷土作家
・平林伸朗(上諏訪一大正9年より万朝報俚謡壇投稿・郷土の狂音)「みず湖」湯の華吟社「俚謡公論」等で活躍)
・笠原逸公(諏訪豊田一大正6年頃から万朝報等で活躍)
・小池白洋(岡谷・下浜一大正8年頃より 〃)
・宮坂孤松(上諏訪・東京一大正10年頃より 〃)
・堀のぼる(茅野・宮川一昭和2年信陽俚謡壇「俚謡公論」・俚謡十六人集「鬱金の風」同人として活躍)
・金子 小波(諏訪・湖南一明治21年生れ。大正初期より活躍)
・柳沢 多門(茅野・北山一大正末より吉沢可寛公に就く。「俚謡公論」同人)
・山浦 俊陽(小県・滋野一大正初期から活躍)
・清水二六史(〃 〃 一明治39年から活躍)
・百瀬香遠流(上諏訪一大正5年頃から活躍)
・橋本 梢波(埴科・清野一大正8年頃から、下野幽波先生師事)
- (4) 「明治・大正・昭和 全日本民謡作家百人集」
(昭和44年全日本民謡作家連盟つくばね会編)
・平林 伸朗(上諏訪・松本) 清水 剣人(更級上山田)
・塩野崎巻浪(岡谷・長地) 堀 のぼる(茅野・宮川)
・林 待人(岡谷・本町)
- (5) 諏訪作詩協会「白樺」誌同人(昭和48年度)
〈同人〉池上 明月 堀 のぼる 藤森 常香 白鳥さとる 塩野崎巻浪
藤森 一二 林 光春 林 待人 安藤 酔花 中村 琳
高木伊勢子 小池 紫峰 中田 楚水 高木 清 海沼 竜柱
一ノ瀬清子 牛山 詩水 柳沢 多門 北原みゆき 岩本 夏風
塩野崎きみ子
〈顧問〉堀 ただ夫 藤森よしと 藤森 一郎 五味 天外 堀 とし路
小尾 俎杖そじょう 宮坂 一眠
〈客員〉清水 剣人 塚田すすき 都築 白樺 山浦 一星 小池 蛙声
窪田 白村 平林 伸朗 石塚 蛙城 都築まこと 菊池星外史
牛山 忠雄 金子 嘉雪
〈編集〉塩野崎巻浪 林 光春 小池 紫峰 堀 のぼる
- (6) 現代長野県民謡作家21人集「分水嶺」(昭和51年白樺社刊)
・池上 明月(宮川丸山)・一ノ瀬清子(辰野)・石塚 蛙城(小諸)
・林 光春(下諏訪)・林 待人(岡谷)・堀 とし路(茅野宮川)

- ・堀 のぼる (茅野宮川)・海沼 竜桂 (岡谷)・田村ちゑ子 (豊平)
- ・都築 白樺 (小諸)・塚田すすき (岡谷)・中村不夜城 (下諏訪)
- ・牛山 忠雄 (玉川山田)・山浦 一星 (小県東部町)・柳沢 多門 (北山湯川)
- ・藤森 一二 (宮川田沢)・塩野崎巻浪 (岡谷長地)・清水 剣人 (上山田)
- ・平林 伸朗 (上諏訪)・鈴木まさる (戸倉町)

(7) 現代日本流民謡作家二十人集「菊日和」(昭和51年 白樺社)

- ・五味 吐月 (宮川両久保)・高木伊勢子 (下諏訪)・田村ちゑ子 (豊平)
- ・一ノ瀬清子 (辰野町)

5. 諏訪地方における民謡の源流

(1) 山浦 (茅野市東部・原村・富士見方面) の祭り歌・盆踊唄

- ・矢ヶ崎部落のぎおん祭 (7月15日) ~八月のお盆にかけて各村々の辻・お寺の庭・神社前の広場で踊りの輪が広がる。
- ・酒室神社の上り祭り (8月26日宮川坂室)
- ・原山祭り (8月27日御射山原)
- ・下り祭り (原村払沢・ハッ手など)
- ・十月の十五夜祭など夜を徹して若者たちが近郷近在から集まって踊り明かした。

▼祭り唄・盆踊り唄・郷土色ゆたかな俚謡

- ゝ盆もおえたし原山様も／待ちるお十五夜まだ遠い
- ・明日の晩くる前約束に／置いてゆかんせ煙草入れ
- ・遠いところを来てくれた／踊りや終えても帰しやせぬ
- ・たとえ世辞でも捨言葉でも／今の言葉を忘りやせぬ
- ・主さ川上私しや川下よ／書いてお流し思うこと
- ・蚕上がれば親湯か渋へ／連れてゆくから辛抱しな
- ・私しの心と永明寺山は／他にや気 (木) はない松ばかり
- ・木曾じゃ御岳甲州じゃ御岳^{みたけ}／諏訪じゃ蓼科八ヶ岳
- ・諏訪の湖水を鏡となして／お化粧するのが富士の山
- ・諏訪の名物寒天生糸／そして鋸種蚕

(2) 諏訪地方の代表民謡としてのエーヨー節と天屋節

▼エーヨー節

〈起源〉元禄時代から唄われていたという説と、糸とり唄として明治に入って製糸が盛んになった頃うたい出されたという説がある。

〈代表的なエーヨー節〉

- ゝ諏訪の平らによしなら二本／思い切るよし切らぬよし
- ・来たら寄つとくれよ破ら家だけど／ぬるいお茶でも熱くする
- ・私しや十三糸とり娘／糸は細らで身が細る

- ・糸は切れ役わしゃつなぎ役／そばの検番おこり役
- ・諏訪の湯の町出てくる時は／一度見返り二度戻る

▼天屋節

〈起源〉製糸とならんで、天保時代より発祥して明治・大正をピークに信州寒天の中心の諏訪で、伊那・水内・佐久・甲州からの出稼ぎの人たちの労働歌として盛んに唄われた。

〈代表的な天屋節〉

▼東蓼科西晴ヶ峰／中の茅野町天屋節

- ・雪下十五度凍てつく寒さ／唄が聞こゆる天屋節
- ・寒い風だよ信州の風は／じわりじわりと身にしみる
- ・天屋若衆に惚れるな女子／花の三月ア泣き別れ

6. 諏訪俚謡作家協会による正調俚謡の発展

(1) 堀のぼる（明治43 1910-平成8 1996）氏の回想

▼大正～昭和初期

- ・信陽新聞俚謡欄に投稿

諏訪地方の指導者一吉沢可寛公・小池白羊・百瀬かをる・笠原逸公等。

諏訪地方の俚謡子百名近く、毎月のように上諏訪・下諏訪・茅野で例会。太平洋戦争が激しくなる頃より衰退。

▼指導者としての歩み

- ・昭和6年、万朝報主催の全国俚謡大会に初参加
- ・昭和8年～月刊「俚謡公論」発行100号まで
- ・昭和11年信陽新聞俚謡選者
- ・昭和38年～俚謡誌「白樺」発行
- ・昭和54年～南信日々新聞俚謡選者、公民館俚謡講座講師
- ・昭和58年「俚謡入門」「民衆のうた考」
- ・平成4年俚謡集「万年青」平成10年「りんごの花びら」（遺稿集）

(2) 俚謡誌「白樺」による主張・啓蒙活動

▼民謡とは、その土地土地に伝わるさとうたであり、俚謡である。俚謡は、生きとし生けるもののふるさとである。喜びにつけ、悲しみにつけ、こよなく愛され、口ずさまれて古来より伝わった民衆のうたである。（「民衆のうた考」）

▼俚謡は民謡である。

民謡は俚謡である。

理屈や理論でなく、民衆の「うた」である。

古きを尋ねて新しきを知る。時代と共に生きる民衆の二十六文字でもある。

文字を見て判ずるものは「うた」ではない。唄う「うた」として耳で聞き、口に伝えて其の意が通ずるものこそ民謡である。

人情・風俗・情緒を詠じ、あるときは時代を諷刺し、またあるいは諧謔^{かいぎやく}を詠じ、風物歴史をひもとき、時代と共に森羅万象を口から耳へ伝える大衆歌である。

▼木にも石にも情をこめて／艶を出しゃこそうたになる。

正調庵黒岩涙香は手引草の中でこう教えている。情と艶によって「うた」の真髄をつらぬくことは最も大切なことである。情愛織りなす人間社会は、物質本位に偏り、トゲトゲしく、心のなごみを社会から奪おうとしている。

私たち俚謡子は、すべてに情をこめて大らかであり、すべてに艶を出し、平和でありたい。中間の輪を広げ、お互いに尊重し合いながら。

・遊びましょうぞえ小唄の園に／睦みむつみて未永く

▼よりよき 前進／よりよき 進歩。

よりよく 大衆の真理をつかみ、／よりよく 作風をもとめ
より多くの 新人を探し、／より多くの同好の士を集め
この道に 貢献しよう。

日本民族とふるさとの中から、自然発生的に生まれ、多くの人に愛唱され、民衆の中に定着した民謡。民謡こそ生きとし生けるもののふるさとである。

▼うたは考えた揚句に必ずしも傑作が出るとは限らない。仕事中でも、五分間のひと休みの中でも生まれるものである。／心に常に作謡心をもつことである。／撓まざる努力こそ佳作である。

▼選手は撓まざる努力によって記録が生まれる。名工の傑作また然り。すべてが、またこの意に通ずる。特に俚謡は、森羅万象を捉え、天然の美、社会の美、人間の美、獣類の美、性の美、悲喜の美、情愛の美、労働の美等々、俗に流れず、隈に溺れず誇張を避け。嘘偽に偏せず、ありのままを素顔美にたえず詠い上げる。その結晶が後世に残るであろう。

▼俚謡は、私たちの生活の記録である。／生活の必要から、生活のたのしみから生まれてくる。／生活の様式の変化により、世代の変化により、作詠の流れが変化してゆく。日常生活の哀歓と、四季の変化をうたいあげる短文芸である。

▼いつでもペンを持っていた。いつでも本を広げていた。日本俚謡協会会長として、東奔西走の中で書いたり、読んだりの量は相当のものであったように思います。(平成10年遺稿集「りんごの花びら」堀のぼる作品集—令息堀晃氏あとがきより)

▼今日、81歳を迎えました。俚謡を始めてから67年、これとって後世に残るうたのないことは慚愧にたえない次第であるが、うたは私の歴史であり、私の生活記録であります。四季折々に詠み、あるいは時事を詠じ、社会を諷刺し…。60余年間の作謡約4万章。このうちメモ帳を紛失したりして、残った2万章の中から既刊本掲載のものは大体除いて「万年青」に年代順に自選して載せたのが1,200章です。

俚謡は自分の趣味であり、喜怒哀楽をのり越えた心の糧とします。雅友と余り優劣

を競うものでもなく「生涯学習」の一片として楽しく勉強しています。人生の一日一日、一年一年の生活の記録でもあり、二十年、三十年と自分の足跡をふり返って、うたで世の移り変わりを思い起こし、これはあの時「わかくさ」・「俚謡春秋」「つくばね」「南風」時代のまた、全国俚謡大会岐阜大会の作などと思いを巡らし楽しんでます。

(堀のぼる著「万年青」平成4年あとがき)

(3) 堀のぼるの作品から

- ・君に逢うまで顔見るまでは／何故か淋しい星祭り (大正15)
- ・俺の山一労働争議／負けて逃げ込む母の家 (昭2)
- ・オリンピック日の丸上げた／日本選手の織田 鶴田 (昭3)
- ・嫁に来ないか都会を捨てて／栗もりんごも実る里 (昭4)
- ・六十余州の糸娘が踊る／盆にゃ岡谷へ参らんせ (昭5)
- ・我に返れば流浪の五年／故郷にゃ二親あった筈 (昭6)
- ・倅二十五マルクス主義よ／理屈ばかりで田は打たぬ (昭7)
- ・ジャズもダンスも知らない田舎／昔ながらの盆踊り (昭7)
- ・男泣きした冷たい言葉／それが男にしてくれた (昭8)
- ・これが日本の光りと陰を／分ける軍部の雪の朝 (二・二六事件)
- ・屠所に曳かれる羊のように／物を言わない列が行く (昭20 シベリア抑留)
- ・勝つと思ったああそれなのに／つんぼ棧敷の民の草 (昭20)
- ・俚謡は作れど投吟先も／なくて空々漠々と (昭26)
- ・若い者には一步をおいて／老いは静かに茶をすする (昭61)
- ・悔は残さぬ八十余年／ぼっくり往生したいもの (平成3)

(4) 個人の俚謡集から

▼「黄楊の樹」堀とし路 (茅野・宮川) 昭和56年

茅野プリント白樺社刊

- ・添え乳はなせば無心の笑顔／愛のうちわで風を生む
- ・今朝の朝顔数える坊の／指が足りない花の数
- ・いっそ渡ろか情けの橋を／よしや男はすたるとも
- ・生きる強さよ枯野の中に／赤い野茨の実が残る
- ・手引草から拾ふた種を／作り育てて五十年

▼「雪割草」小平弘達 (茅野・豊平) 平成11年 長野日报社より

- ・俚謡を学んで豊かな心／角がとれたと笑う妻
- ・昔なつかし炭焼く山は／今じゃゲレンデ雪煙
- ・配る新聞待つ人あって／老いの張り合い雪の朝
- ・山は天国浮世を忘れ／客の世話した峰の小屋
- ・子等に頼りにされなくなって／心わびしく老いを知る
- ・明けた初春金婚喜寿と／目出度かさねた鏡餅

▼「二輪草」竹内清・千恵子夫婦（茅野・湖東）平成12年 長野日報社刊

*竹内清集から

- ・酸いも甘いも知り尽くしての／愛は夫婦のさじ加減
- ・言葉一つが支えになって／愛の手を貸すボランティア
- ・自分一人の暮らしじゃないと／老いて気をつく昨日今日
- ・あれやこれやとこまめの母が／あって我が家に灯がともる

*竹内千恵子集から

- ・お国訛りがとびだす会話／席もにぎわう^{うた}謡開き
- ・家族総出で腰びくつけて／田植した目を懐かしむ
- ・無理な事だと承知の上で／孫にやついづい甘くなり
- ・澄んだ名月ベッドの母に／合わせ鏡で見せてやり

7. まとめ

「民衆のうた」として、日本各地方に自然発生的に生みだされ、長い間、ある時は労働の歌として、また盆唄や祭りの唄、あるいは座敷唄として伝承されてきたフォーク・ソングとしての俚謡の歩みにふれてみた。

そして、明治37年に、子規の俳句・短歌革新運動に呼応するようにして起こった、黒岩涙香による「正調俚謡」革新運動により、その後文芸としての創作俚謡が大正～昭和10年代隆盛を極めるようになった。残念なことには、戦争と、敗戦後あわただしくゆりのない生活が続いて、かつての栄光の時代はなかなか甦らない。

そうした中であって、堀のぼる主宰の俚謡誌「白樺」が1964年～1995年熱心な愛好者を多数育てまた、公民館の俚謡講座等により地域に愛好グループが育ちつつあることは喜ばしい。最大のグループとして茅野市俚謡作家協会が月例会をもち活潑に活動しているが、これからの課題として若い同人を加えて更に鮮度を上げた創作を進めたいとしている。

8. 参考文献

- 堀のぼる「俚謡入門」1978 茅野プリント
〃 「民衆のうた考」1983 白樺社
小池安右衛門・小口伊乙「諏訪北山民謡集」1982 岡谷書店
下野幽波「花野・俚謡四十六人集」1969 つくばね会
堀のぼる「分水嶺・現代長野県民謡作家二十一人集」信濃路
〃 「菊日和・現代日本女性民謡作家二十人集」白樺社
〃 俚謡誌「白樺」(1964～1995) 120号 白樺社
金田一春彦他「日本語大事典」1989 講談社
新村出「広辞苑」第3版1988 岩波書店